「bush」はなぜ「柴」と訳されたのか
―聖書の日本語訳について―

山 下　洋 子

１．　はじめに

現代の日本で使われている聖書にはいくつかの種類がある。そのうち、プロテスタント各派が翻訳を行った『聖書新改訳』（以下「新改訳」）と、また特に使用者が多いとされるカトリックとプロテスタントの訳を統合した聖書である『新共同訳聖書』（以下「新共同訳」）とがそれぞれ、2017 年と、2018 年に改訂された。

「新改訳」の改訂のポイントや経緯については『聖書翻訳を語る『新改訳 2017』何を、どう変えたのか』（いのちのことば社・2019）にまとめられており、その中で次のような説明がある。

> たとえば、「柴」「ちり」はその意図されている意味に解釈されにくくなってきており、今回「柴の茂み」（出エジプト 3:2）、「土のちり」（創世記 3:19）とした箇所がある。

現代では「柴」「ちり」などの意味が伝わりにくくなっており、そのため「茂み」や「土」という語を補助する必要があると判断したということである。

「柴」という植物があるわけではない。たとえば、「柴」は『大辞林第 4 版』（2019、以下『大辞林』）に次のように立項されている。

> 山野に自生する小さい雑木。また、薪や垣にするためにその枝を刈り取ったもの。そだ。しばき。

こうした意味から考えて「茂み」とことばを補助すると、かえって意味が通じにくくなるのではないか、「柴」では伝わりにくいというのであれば、「木の茂み」あるいはただ単に「木」と訳してもよかったのではないかという印象を受けた。本稿では、聖書の「新改訳」で「柴」から「柴の茂み」に訳語が変更されたことを疑問の出発点として、「柴」について次のことを明らかにする。

①和訳聖書で「柴」とされた部分の原語・英語・中国語はどのような語だったのか。
②「柴」の訳はいつごろから使われているのか。
③なぜ「柴」と訳されたのか。

２．　先行研究

本稿で取り上げる聖書の「柴」とは、旧約聖書の「出エジプト記」3章2節（以下、聖書の章と節は「3:2」などと略して示す）に出てくる。「新共同訳」では次のようにある。

> そのとき、**柴**の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、**柴**は火に燃えているのに、**柴**は燃え尽きない。

ヤハウェあるいはエホバと呼ばれる神が、モーセの前に「燃える柴」になって現れ、神のことばを伝えるという逸話であり、この場面は「モーセの巻」あるいは「モーセの柴の巻」「燃える柴」などと言われる。

聖書には多くの植物の名前が見られ、そうした聖書に見られる植物について宗教学あるいは植物学の観点から、これまで多くの研究が行われている。

大槻（1971）には、「聖書の植物」についての、日本および海外での先行研究がまとめられている。また「柴」についての言及はないが、聖書における植物のヘブライ語、ドイツ語、日本語の対訳一覧がまとめられている。

和訳聖書では、植物名の訳語がおかしいため変更をうながす意見もあったようで、松村（1947）では次のようにある。

> このごろ旧約聖書改訳が行われているときいているが、その節、是非とも植物名の訂正もついでにやってほしいと考えている。

パレスチナには多くの棘（とげ）のある植物が自生しており、聖書に語られている植物の中にもそれらが見られる。大貫（1933）はこうした聖書に掲載のある棘のある植物のうち「いばら」についてまとめている。聖書の植物名が和訳聖書でどのように変遷したのかについて述べているものには、鈴木（2008）がある。

「燃える柴」については、松村(1953)、浜(1954)、モルデンケ（1991)、広部（1995）で、実際にはどのような植物なのか言及している。松村（1953）は、「燃える柴」はアカシアであると述べ、パレスチナにある5種のアカシアのうち、ナイルアカシアが英語ではbushと訳され、日本語では「柴」と訳されたものであるという。浜（1954）は外国の聖書の植物についての研究書の内容として、「柴」については諸説あると述べている。

> 出エジプト記の、火に燃ゆれどもやけざる棘（しば）の棘に当るものに就いては学者の間に種々の意見があり、之を全く超自然の現象と見る人あり、或はDictamnus albus L,ー三吋位の灌木でこの植物は全表面が油腺で被はれ、よく燃えるーがその棘とする者あり、又アカシアとの説もある。ヤドリギ科のLoranthus acaciae（アカシアヤドリギ）説は最もlogicalなもので、その花は燃える様な真紅である。

モルデンケ（1991）も浜（1954）同様、アカシアの説とヤドリギであるという説と

があるが、ヤドリギとするのが最も理屈のあう説明であるとする。
広部(1995)は、「燃える柴」の「柴」はヘブライ語では「sneh」（スネー）となっている部分であるとし、これを「セイチクロイチゴ」とする説と、「アカシア」とする説とがあると述べている。また、「燃える柴」と訳されている現象はモーセが見た幻であり、木の種類は問題ではなく「燃える木」という程度の意味であるとする考え方もあるとされる。

> 私自身はこの柴についてコメントすることを避けたい。ただ言えることはシナイ半島で火が燃えているような光景は、そしてその火によって柴が燃え尽きないような光景はとても想像しがたい。何かの植物がこの場面に関与していたんであろうが、このような超自然的現象を自然現象として説明することをあまりやりたくない。蜃気楼であったかもしれないし、別の何かであったかもしれないがこれ以上の詮索をしても何も意味がないような気がする。ただし、ヘブライ語のスネーを柴と訳すのはあまりよくないように思う。日本の柴のようなものはシナイには見かけない。

このように先行研究から見ても、なぜ「柴」と訳されたのかという疑問が生じるが、こうした疑問について触れているものは見当たらない。
また、江戸時代からの宣教師などによって行われた聖書を翻訳する作業と訳語の変遷についてまとめたものに、鈴木（2006）があるが、そこにも「柴」の翻訳については触れられていない。

３．　和訳聖書における「柴」の訳

３．１　「出エジプト記」における「柴」

前に述べたとおり、「燃える柴」の逸話は「出エジプト記 3:2」で語られるが、「出エジプト記」以外でも神の象徴として「燃える柴」が語られる場面がある。「新共同訳」において「燃える柴」に関連したものとして、「柴」「柴刈り」と訳されている箇所を、eBible Japan（聖書研究総合サイト）と『聖書語句大辞典』（教文館・1959）での掲載で調べた。下記のとおりである。

> ・「申命記」（旧約聖書）33：16
> 地とそれに満ちるものの賜物**柴**の中に住まわれる方の慈しみ。それらすべての恵みがヨセフの頭に兄弟たちから選ばれた者の頭に臨むように。
> ・「マルコによる福音書」（新約聖書）12：26
> 死者が復活することについては、モーセの書の『**柴**』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。
> ・「ルカによる福音書」（新約聖書）20：37
> 死者が復活することは、モーセも『**柴**』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。

・「使徒言行録」（新約聖書）7：30（7：35 にも同様の「柴」が見られる）
四十年たったとき、シナイ山に近い荒れ野において、**柴**の燃える炎の中で、天使がモーセの前に現れました。

また、「燃える柴」とは関係なく「柴」という語が使われている箇所もある。これについても「新共同訳」で「柴」「柴刈り」などと訳されている部分を eBible Japan（聖書研究総合サイト）と『聖書語句大辞典』（教文館・1959）で調べたところ、下記のような例が見られた [1]。

・「申命記」（旧約聖書）19：5
すなわち、隣人と**柴**刈りに森の中に入り、木を切ろうと斧を手にして振り上げたとき、柄から斧の頭が抜けてその隣人に当たり、死なせたような場合である。彼はこれらの町の一つに逃れて生き延びることができる。
・「ヨシュア記」（旧約聖書）9：21（9：23、9：27 にも「柴刈り」とある）
指導者たちは続けた。「彼らを生かしておき、共同体全体のために**柴**刈りと水くみをさせよう。」彼らはこうして、指導者たちの告げたとおりになった。
・「詩編」（旧約聖書）58：9
鍋が**柴**の炎に焼けるよりも速く生きながら、怒りの炎に巻き込まれるがよい。
・「コヘレトの言葉」（旧約聖書）7：6
愚者の笑いは鍋の下にはぜる**柴**の音。これまた空しい。
・「イザヤ書」（旧約聖書）64：1
柴が火に燃えれば、湯が煮えたつようにあなたの御名が敵に示されれば国々は御前に震える。

さて、これら「新共同訳」で「柴」と訳されている部分は、それ以前の和訳聖書ではどのような語で訳されていたのだろうか。まず、「出エジプト記 3:2」の「柴」の部分の訳の変遷は次のとおりである。漢訳聖書や和訳聖書は明治学院大学図書館のデジタルアーカイブに掲載されているものを調べた [2]。また、欽定訳聖書および現代の聖書については eBible Japan で調べた。旧約聖書の原語がヘブライ語であるため、その原語情報も示す。ヘブライ語は『聖書語句大辞典』（教文館・1959）を参照した。

表１　「出エジプト記」3：2「燃える柴」の逸話

ヘブライ語		Seneh
欽定訳聖書	1611	**Bush**
旧約全書	1863（漢訳聖書）	**棘**
旧新両約聖書伝	1883	**焔森**（エンシン）の事 **森中**（モリノウチ）火焔（クワエン）ノ上ニ現レリモイゼス**森**ノ焼ザ

		ルヲ怪ミ（略）
訓点旧約全書	1883（訓点聖書）	**棘**
旧新約全書	1887	**棘（しば）**
口語訳	1955	**しば**
新共同訳	1987	**柴**
新改訳３版	2003	**柴**

小林(1980)によれば、明治時代に聖書を和訳するにあたってもとにされたのは「英語の欽定訳聖書と漢訳聖書」である。欽定訳聖書とは、1611 年に刊行された King James Version（以下、KJV）のことで、表 1 に示したとおり「柴」に該当する語は「bush」となっている[(3)]。漢訳聖書では「棘」と訳されている。「棘」は日本語では、「とげ」「いばら」「おどろ」「きょく」などと読まれ、いずれも「とげのある低木」を指す[(4)]。これが、明治時代の日本語訳では「森」と訳され、その後「棘」と書いて「しば」という読みがながつけられるようになっていることがわかる。「棘」に「しば」の読みがながつけられたのは『旧新約全書』であり、これ以降の訳ではすべて「しば」あるいは「柴」の訳が使われている。鈴木（2006）によれば、『旧新約全書』は何人かで訳しているが、その中で「出エジプト記」を訳したのは J.C.ヘボン（ジェームス・カーティス・ヘボン）とされる。ヘボン（1815-1911）は、ヘボン式ローマ字で知られ、日本最初の和英辞典である『和英語林集成』を 1867 年に出版した。日本には、1859 年に宣教医として来日し、聖書の和訳も行った人物である。

３．２　「出エジプト記」以外の「燃える柴」の訳

次に「出エジプト記」以外の部分に見られる「燃える柴」関連の記述がどのように翻訳されてきたのかを見る。変遷は下記のとおりである。これも、明治学院大学図書館のデジタルアーカイブ、eBible Japan に掲載されているものを調べた。またヘブライ語およびギリシャ語の原語については『聖書語句大辞典』(教文館・1959) をもとにした。

表 2「申命記」33：16

ヘブライ語		seneh
KJV		bush
旧約全書	1863・漢訳聖書	叢中
訓点旧約聖書	1883	叢中
口語訳	1955	しばの中
新共同訳	1987	柴の中
新改訳	2003	柴の中

表 3　「マルコによる福音書」12：26

ギリシャ語		batos

KJV		bush
新訳聖書馬可伝	1872	棘中（いばら）
畧解新約聖書	1876	棘中（イバラノウチ）
新約聖書　馬可伝	1877	志ば
新約全書	1879	棘中
志無也久世無志与	1879	しやうぼく　çóuboku
Warerano shu Iyesu Kirisuto no shin yaku zen sho.The new testament in Japanese	1880・ローマ字聖書	shiba
新約全書	1880	棘中（しば）
引照　新約全書	1880	棘中（しば）
新約全書	1881	棘中（シバ）
新約聖書　馬留古伝福音書	1882	小木（せうぼく）
新約全書	1882	棘中（しば）
未留古亭無	1885	しやうぼく
新約聖書馬可伝	1886	小木（せうぼく）
引照　新約全書	1889	棘中（志ば）
略注新約全書	1907	棘中（しば）
我主イエズスキリストの新約聖書	1910	荊棘（いばら）
改訳新約聖書	1917	柴（しば）
新契約聖書	1928	柴
新契約聖書	1932	柴
新約聖書	1952	柴（しば）
四福音書　使徒行伝	1953	柴（しば）
口語　新約聖書	1954	柴（しば）
口語訳	1955	柴
新契約聖書	1960	柴
新共同訳	1987	柴
新改訳	2003	柴

表４　「ルカによる福音書」20：37

ギリシャ語		batos
KJV		bush
路加伝福音書	1858	クサムラ
新約全書	1861・漢訳聖書	棘中

路加伝福音書	1873	くさむら
新約聖書路加伝	1875	棘中（しば）
新約聖書路加伝	1876	棘中（しば）
新約全書	1879	棘中
志無也久世無志与	1879	せうぼく　小木 çōuboku
新約聖書路加伝	1880	棘中（しば）
Warerano shu Iyesu Kirisuto no shin yaku zen sho.The new testament in Japanese	1880・ローマ字聖書	shiba
新約全書	1880	棘中（しば）
引照新約全書	1880	棘中（しば）
新約聖書路加伝	1881	棘中（しば）
新約全書	1881	棘中（シバ）
新約全書	1882	棘中（しば）
留加亭無	1883	せうぼく
引照新約全書	1889	棘中（しば）
略注新約全書	1907	棘中（しば）
我主イエズスキリストの新約聖書	1910	茨（いばら）
改訳新約聖書	1917	柴（しば）
新契約聖書	1928	柴
新契約聖書	1932	柴
新約聖書	1952	柴（しば）
四福音書-使徒行伝	1953	柴（しば）
口語新約聖書	1954	柴（しば）
口語訳	1955	柴
新契約聖書	1960	柴
新共同訳	1987	柴
新改訳	2003	柴

表５　「使徒言行録」７：30

ギリシャ語		batos
KJV		bush
新約全書	1863	棘中
使徒行伝	1874	くさむら
新約聖書　使徒行伝	1877	棘（志ば）

新約全書	1879	棘中
志無也久世無志与	1879	せうぼく（小木）çōuboku
志とぎやうでん	1880	志ば
Warerano shu Iyesu Kirisuto no shin yaku zen sho.The new testament in Japanese	1880	shiba
新約全書	1880	棘（志ば）
引照　新約全書	1880	棘（志ば）
新約聖書　使徒行伝	1881	棘（シバ）
新約全書	1881	棘（シバ）
新約全書	1882	棘（志ば）
引照　新約全書	1889	棘（志ば）
略注新約全書	1907	棘（しば）
我主イエズスキリストの新約聖書	1910	茨（いばら）
改訳新約聖書	1917	柴（しば）
新契約聖書	1928	柴
新契約聖書	1932	柴
新約聖書	1952	柴（しば）
四福音書―使徒行伝	1953	柴（しば）
口語　新約聖書	1954	柴（しば）
口語訳	1955	柴
新契約聖書	1960	柴
新共同訳	1987	柴
新改訳	2003	柴

聖書には、救い主であるイエス・キリストが地上につかわされる以前の神との約束をまとめた旧約聖書と、イエス・キリスト誕生以降の神との約束をまとめた新約聖書とがあり、それぞれ最初に書かれた言語が異なる。旧約聖書はヘブライ語、新約聖書はギリシャ語だが、表 2～表 5 を一覧すると、これらヘブライ語「seneh」およびギリシャ語「batos」が英語では「bush」に、中国語では「棘」に訳されており、和訳聖書においては、旧約聖書は「森、叢、柴」、新約聖書は「くさむら、小木、いばら、柴」と訳されている。この中で「柴（あるいは「しば」）」の訳が最初に見られるのは、1875 年の『新約聖書路加伝』である。この訳は「出エジプト記」において「しば」の訳を最初につけたのと同様、ヘボンによるものである（鈴木 2006）。なお、これ以前、ヘボンが訳した『新訳聖書馬可伝』(1872)では「棘中（いばら）」である。

３．３　「燃える柴」以外の場面で出てくる「柴」

一方、「燃える柴」以外の「柴」の訳語は「柴」に安定していない（表6～表10）。「新共同訳」で「柴」「柴刈り」と訳されていても、ほかでは「木」「いばら」であるものが見られる。ヘブライ語もいくつかの語があり、英語も「wood」や「thorn」「fire burneth」など、いくつもの語に訳されている。ただし、「bush」は見られない。

表6　「申命記」19：5

ヘブライ語		ets
KJV		into the wood
旧約全書	1863・漢訳聖書	林伐木
訓点旧約聖書	1883	林ニ伐ンキレ木ヲ
口語訳	1955	木を切ろうとして、隣人と一緒に林に入り
新共同訳	1987	柴刈りに森の中に入り
新改訳	2003	木をきるため隣人といっしょに森に入り

表7　「ヨシュア記」9：21

ヘブライ語		etsim
KJV		be hewers of wood
旧約全書	1863	析薪
旧約聖書　約書亜記	1882	薪をきり
訓点旧約聖書	1883	析リレ薪ヲ
口語訳	1955	たきぎをきり
新共同訳	1987	柴刈り
新改訳	2003	たきぎを割る

表8　「詩編」58：9

ヘブライ語		atad
KJV		thorn
旧約全書	1863	荊
訓点旧約聖書	1883	荊
旧約聖書　詩編	1887	荊棘（いばら）
The Book of Psalms English and Japanese	1888	Ibara
口語訳	1955	いばら
新共同訳	1987	柴
新改訳	2003	いばら

表 9　「イザヤ書」64：1

ヘブライ語		hᵃmasim
KJV		Fire burneth
旧約全書	1863	柴
訓点旧約聖書	1883	柴
口語訳	1955	柴木（しばき）
新共同訳	1987	柴
新改訳	2003	柴

表 10　「使徒言行録」28:3

ギリシャ語		phruganon
KJV		sticks
新約全書	1863	薪
使徒行伝	1874	たきぎ
新約聖書　使徒行伝	1877	柴（しば）
新約全書	1879	薪
志無也久世無志与	1879	きのえだ
志とぎやうでん	1880	志ば
Warerano shu Iyesu Kirisuto no shin yaku zen sho.The new testament in Japanese	1880	shiba
新約全書	1880	柴（志ば）
引照　新約全書	1880	柴（志ば）
新約聖書　使徒行伝	1881	柴
新約全書	1881	柴
新約全書	1882	柴（志ば）
引照　新約全書	1889	柴（志ば）
略注新約全書	1907	柴（しば）
我主イエズスキリストの新約聖書	1910	柴（しば）
改訳新約聖書	1917	柴（しば）
新契約聖書	1928	柴
新契約聖書	1932	柴
新約聖書	1952	柴（しば）
四福音書―使徒行伝	1953	柴（しば）
口語　新約聖書	1954	柴（しば）
口語訳	1955	柴

新契約聖書	1960	柴
新共同訳	1987	枯れ枝
新改訳	2003	柴

「詩編 58：9」（表 8）で使われる英訳「thorn」は明治時代の和訳聖書および、口語訳、新共同訳など、ほとんどが「いばら」と訳されている。また漢訳聖書では「荊」「荊棘」と訳されていることが多い。

「イザヤ書 64:1」（表 9）は、漢訳聖書、和訳聖書ともに「柴」と訳されている。燃やすための枝としての使用である。なお、KJV で「bush」が使われているのは、「燃える柴」以外では「イザヤ書 7:19」の「bushes」だけである。この部分は「柴」と訳されることはなく、明治時代の和訳聖書では「草地」、「新共同訳」では「牧場」と訳されている。

３．４　「bush」の訳語の変遷

「新共同訳」に「柴」とある部分の、日本語訳の変遷を調べた結果、「燃える柴」に関連する部分については、いずれもヘブライ語は「seneh」、ギリシャ語は「batos」、英語では「bush」と訳していることがわかった。日本語では「棘」「棘（いばら）」「森」「小木」「くさむら」「棘（しば）」「柴」という訳語が変化している。「柴」と訳され始めたのは 1875 年以降である。旧約聖書、新約聖書ともに「柴」（実際は「棘」「棘中」に「しば」の読みがな）が見られるのはヘボンによって訳された聖書である。

「燃える柴」以外にも聖書には「柴」のことばが出て来るが、いずれももとになるヘブライ語、ギリシャ語、英語がばらばらであり、漢訳聖書の訳もばらばらである。こうしたことから、「燃える柴」は聖書の中では特別な場面としてヘブライ語およびギリシャ語も決まった語が使われており、こうした原語の選択が漢訳聖書、和訳聖書にも影響しているのではないかということを感じさせる。

４．　英和辞典・和英辞典および英華字典での訳語

４．１　英和辞典・和英辞典における「柴」関連の語

3 節で調べた結果「柴」という訳語は漢訳聖書に見られないこと、また、「bush」が「柴」と訳されたことがわかった。次に、聖書以外の場面で、「bush」と「柴」が結びつくことがあるのかを確かめるために、英和辞典・和英辞典と英華字典の掲載を調べる。このことで、「柴」の訳語が日本特有の訳であることが裏付けられると考える。

現代の英和辞典では「bush」と「柴」は結びついていない。たとえば、『ランダムハウス英和大辞典』（小学館・ジャパンナレッジで検索）によれば「bush」の意味は「灌木、低木」あるいは「（(しばしば the bush)）（1 本の木のように見える）低木の茂み，叢林(そうりん)（草やササなどの茂った「やぶ」という意味はない）」である。また『プログレッシブ和英辞典』（小学館・ジャパンナレッジで検索）で「柴」に対して示されている英語は「(そだ) brushwood、(まき) firewood」である。

では江戸から大正にかけての英和辞典ではどうかを調べる。和訳聖書で「柴」と訳

されることがある「bush」「fire burneth」「stick」「thorn」「wood」が、明治時代以降の英和辞典・英華字典においてどのような訳語がつけられているのかを調べる。また、加えて英語で「柴」に近い「小枝・そだ」の意味をもつ「brushwood」および「たきぎ」として使われる「firewood」の掲載も調べる。なお、「brushwood」「firewood」はKJVには見られない単語である。

表11　英和辞典の語釈

英和対訳袖珍辞書	1862	Bush　森林、狐ノ尾 Brushwood　木ヲ伐リタル跡、三度生杯ノ茂リタル森林 firewood　薪 Stick　管、杖 Thorn　刺ノアル木、刺ノ草木 Wood　木、森
和英語林集成初版	1867	BRUSHWOOD　Tszmagi（つまぎ）; **shiba** FIREWOOD　Takagi,maki STICK　Bo, sao, tszye, ki THORN　Toge, hari WOOD　Ki, takigi,maki, moku, hayashi, zai-moku
和訳英辞書 （薩摩辞書）	1869	Bush　森。林。狐ノ尾 Brush-wood　木ヲ伐リタル跡ニ二度生抔（バエナド）ノ茂リタル森林（モリ） Firewood　薪 Stick　枝。杖。ボウ。衝キ Thorn　刺（イラ）ノアル木。刺（草木の） Wood　木、森
和英語林集成再版	1872	BRUSHWOOD　Yabu;**shiba** FIREWOOD　Takagi,maki STICK　Bo,sao, tsuye, ki THORN　Toge, hari WOOD　Ki,takigi, maki, moku, boku, hayashi, zai-moku
附音挿図英和字彙	1873	Bush　茂ル、茂盛スル Brushwood　矮樹（ヒクキキ） Firewood　薪（マキ） Stick　條（コエダ）。**柴（シバ）**。棒。杖。竿。刺（サシ）。衝（ツキ） Thorn　荊棘（イバラ）。刺（ハリ）（草木ノ） Wood　林。森。木。薪。材木。木仏

増補訂正英和字彙	1882	Bush　藪、叢、林、茂樹、狐尾 Brushwood　叢。矮樹。**柴** Firewood　薪、**柴薪、柴火** Stick　條。**柴**。棍。棒。杖。竿。刺。衝 Thorn　荊棘（イバラ）。**=**（竹かんむりに勒）。刺（草木ノ） Wood　林。森。木。薪。材木。木仏
英和対訳辞典	1885	Bush　森、藪、林 Brush-wood　下生（シタバエ）ノ樹（キ） Stick　杖、竿、條（コエダ） Thorn　荊棘（イバラ）、草木ノ刺（ハリ） Wood　林、森、材木、薪
和英語林集成３版	1886	**bush**　Chisai ki,**shiba** BRUSHWOOD　Yabu;**shiba** FRIREWOOD　Takigi,maki THORN　Toge, hari WOOD　Ki,takigi,maki,moku,boku,hayashi, mori,zaimoku
新訳英和辞典	1902	Bush　①叢林、藪（ヤブ）②灌木；枝ノ茂レル矮樹③常春藤ナドノ枝 Brushwood　①矮林ヲ以テ覆ハレタル②刷毛ニ似タル、毛ノ叢レル。粗ナル Stick　①棒、竿、杖、木條②**柴**、薪③棒状ノ物④鈍物、無能漢⑤（印）植字架⑥帆檣 Wood　①森林（多ク複数ニテ用フ）②木臀③木、材木、木材④薪⑤桶、樽

英和辞典の掲載で最初に「柴」の訳が見られるのは、ヘボンによる『和英語林集成』だが、初版(1867)、２版(1872)は「brushwood」の訳語としての使用である。「bush」の訳語として「柴」が見られるのは３版(1886)である。そのほか「bushwood」が「柴」と訳されている例が多いが、『附音挿図英和字彙』では「stick」にも「柴」の訳が見られる。

今回調べた中で「bush」には古い聖書の訳として見られる「森」「叢」の訳がつけられることが多く、「柴」が結びついているのは、『和英語林集成』第３版の英和の部のみである。なお和英辞典では表 12 のとおり「brushwood」の訳として見られるだけである。

表 12　和英辞典の「柴」の語釈

和英語林集成初版	1867	SHIBA　**シバ、柴**　Brushwood　-wo　karu,　to　cut

和英語林集成再版	1872	brushwood
和英語林集成3版	1886	SHIBA **シバ、柴** Brush-wood:－wo karu, to cut brush-wood;-buruibito, one who gathers brush-wood
漢英対照いろは辞典	1888	**柴**、そだ、たきび Brush-wood

４．２　英華字典における「柴」

次に、英華字典で「柴」「棘」「bush」「brushwood」がどのように掲載されているのかを調べる。

表13　英華字典の「柴」

モリソン五車韻府	1865	Bundles of sticks;fuel.
司登得中英袖珍字典	1874	Fuel, firewood
翟理斯華英字典	1912	一把柴 bundle of wood, 打柴的 a wood-cutter.(略)柴米 fuel and rice;the neccesaries of life

表14　英華字典の「棘」

モリソン五車韻府	1865	Certain thorny bushes fit for making fences of ; －in a length of time they grow large;to fence.
司登得中英袖珍字典	1874	A kind of thorny bush used for making fences;to fence
翟理斯華英字典	1912	Small species of the genera Rhamnus and Zizyphus, useful for hedges. The jujube tree(Zizyphus jujube)

表15　英華字典の「bush」

ウィリアムズ英華韻府歴階	1844	小樹
メドハースト英華字典	1847-48	叢
ロブシャイト英華字典	1866-69	To grow thick or bushy, 生得叢、生得茂盛、生得茂密濃度、生得秀茂
ドーリットル英華萃林韻府	1872	小樹
井上哲次郎訂増英華字典（1884)	1884	A shrub with branches, 茂樹 ; a cluster of shrubs, 叢
鄺其照華英字典集成	1899	叢、叢生矮樹
顔惠慶英華大辭典	1908	１. A thick shrub, 矮叢樹 ; ２. A cluster of shrubs, 叢、叢林、楚 ; ３. A bramble-

		bush, 楚, 荊 ; the boughof a tree, 樹枝;(略) 5. A wild uncultivated tract of land covered with brushwood, etc., 荊棘叢生之地; 6. Anything like a bush, 似矮樹者 (略)
商務書館英華新字典	1913	茂樹、叢林 (略)
ヘメリング官話	1916	(shrub) 矮叢樹。灌木

表 16　英華字典の「brushwood」

メドハースト英華字典	1847-48	柴
ロブシャイト英華字典	1866-69	叢、矮樹
井上哲次郎訂増英華字典	1884	叢、矮樹
鄺其照華英字典集成	1899	矮樹
顔惠慶英華大辭典	1908	1 小叢林、粗矮而叢密之小林 2 伐下之樹枝、柴
ヘメリング官話	1916	叢棵子、樹棵子

このほか、和訳聖書で「柴」と訳されている「thorn」「wood」「fireburnet」「firewood」「stick」の英華字典の掲載を調べたところ「firewood」は『ウィリアムズ英華韻府歴階』(1844) 以降で「柴」と訳されている。また、「stick」には『商務書館英華新字典』(1913) に「柴」の訳が見られた。

しかし、英華字典には「bush」と「柴」が結びついている例は見られなかった。

ここまで調べたことから、「bush」を「柴」とするのは、日本独自の訳し方であることがわかる。これは和訳聖書においてはヘボンが翻訳にたずさわった 1875 年の『新約聖書路加伝』から見られる。「出エジプト記」において「柴」と初めて訳したのもヘボンである。また英和・和英辞典では、やはりヘボンによる『和英語林集成第 3 版』に見られるのみであり、「燃える柴」の逸話における「柴」の訳はヘボンによってなされた、あるいはヘボンに関係の深い訳であると考えてよいだろう。

5.　なぜ「柴」と訳したのか

最後に「柴」と訳されたのはなぜなのかを考える。

『日本国語大辞典第 2 版』(小学館・2000～2001) によれば、「柴」は『新撰字鏡』(898～901)、『色葉字類抄』(1177～1181)、『類聚名義抄』(平安末)、『和玉篇』(15 世紀後)、『文明本節用集』(室町中)、『伊京集』(室町)、『明応五年本節用集』(1496 奥書)、『天正十八年本節用集』(1590 刊)、『饅頭屋本節用集』(室町末)、『黒本本節用集』(室町)、『易林本節用集』(1597 刊) などの古辞書に掲載されているようである。この中で、『明応五年本節用集』には「焼木」という意味が示され、「野草」という意味の「芝」と区別されている。このほか『物類称呼』(1775) にも掲載があり、「柴」の方言形が示されている。たとえば「東国にてそたといふ」とある。

では、日本人にとって「柴」がどういう役割をもつものだったのだろうか。先行研究をもとに調べる。

日本人の生活における「柴」「柴刈り」については、西山（1982）にくわしい。西山氏は、兵庫県赤穂市に1912年に生まれている。子ども時代の経験をもとに、大正から昭和初期の地方での「柴」「柴刈り」について説明している。「柴刈り」は、家の炊事に使う薪にするために冬の間に行われた。刈る場所によって持っていくものが違ったようだ。自分の山を持っていない家は、命山と呼ばれる地域の共有林に車力（荷車）を持って柴刈りに行ったという。

> 自分の山を持っている家では、自分の山に柴を刈りにいった。
> 松の下萌えに、かつむし・つつじなどが伸びているのを刈り集め、それを束にして、両方が尖っている丸太棒の「おーこ」というので突きさして、肩にかついてくるのです。

西山（1982）によって、大正、昭和の初めの地方の生活には「柴刈り」はなくてはならない仕事であったことがわかる。それだけ生活の中で「柴」は身近なものだったと言える。

次に、日本各地に古くから伝わる伝説や昔話に見られる「柴」「柴刈り」の役割についてまとめる。これについては狩野(2007)にくわしい。

> 柴は祭祀や儀礼などでもよく用いられた。柴はたんなる燃料にとどまらず神聖な呪具としての一面もあったのである。神社に行くと、神主が榊の枝に麻のシデをたらしたご弊でお祓いをする姿がみられる。榊も広い意味での柴であり、柴には呪力があることから、その呪力によってケガレをはらうのである。
> 　かつて常緑樹一般のことをシバといったが、厳密にいえば、柴は榊をはじめとする常緑樹の小枝のことをいい、柴の呪力も、つまるところ常緑樹という性格からきているようである。

すなわち、「柴」は「神の依り代」として神へ祈りをささげるために使われていたということである。こうした「柴」の役割は、現代まで伝わる神楽で、実際に見ることができる。筆者は島根県松江市にある佐太神社に伝わる佐蛇神能において「柴」が使われるのを見ることができた。八岐大蛇の伝説を演じる「八重垣」という神能において、八岐大蛇は両手に「柴」を持ち、背に「柴」を背負った姿で現れる[(5)]。

また、狩野(2007)では「山頂で柴を焚く風習は日本でも雨乞いの儀礼などでよく見られる」ともある。すでに述べてきているように、聖書の「燃える柴」の場面はモーセが神に祈りをささげるために、山に登り、山頂で祈りをささげていたときに起こったできごとである。神の依り代である柴を山頂で焼き、神に祈るという日本の風習が、聖書の「燃える柴」の逸話と重なる。

「柴」は、古辞書にも掲載があり、日本人の生活にも身近なものとして存在した。また神の依り代としても使われてきた。こうしたことが聖書で「bush」が「柴」と訳

された理由とも考えられそうである。

また、このような理由で明治時代に「bush」が「柴」と訳されたのであれば、むしろ「柴」は適切な訳であったと言えそうである。「新改訳」が「柴」という語を変更し、単なる「木」などにしなかったのはうなずける対応である。一方で、「茂み」ということばの追加も必要がなかったようにも感じられる。

６．　まとめ

本稿では、聖書の訳に見られる「柴」について、翻訳の歴史を調べ、なぜ「柴」と訳されたのかを考えた。

聖書における「柴」の訳語は、明治時代の和訳聖書から見られる。当初は「森」「いばら」「くさむら」「しょうぼく」などと訳されていた。英語は「bush」であり、漢訳聖書では「棘」である。1875 年にヘボンが訳した「ルカによる福音書」以降「棘」に「しば」の訳がつけられるようになり、その後の訳では「柴」に統一されていった。また、英和辞典および和英辞典では、ヘボンによる『和英語林集成』第 3 版（英和の部）で「bush」の訳に「柴」が見られるのが最初である。なお、英華字典においては「bush」と「柴」とは結びついておらず、これは日本独自の訳である。聖書の「燃える柴」についての訳は、ヘボンあるいはその周辺の人々による訳であったと考えられる。

では、ヘボンはなぜ「柴」と訳したのだろうか。

広部（1995）は、「出エジプト記」に見られる「燃える柴」の逸話は、「燃える木」という程度の意味であり、「柴」の訳は適切ではないという意見を述べている。

「燃える柴」は宗教画にも多く描かれているが、小さな木、バラ、あるいは象徴としての炎だけが描かれているものが多い。また、尾崎（2014）には、「燃えているのに燃え尽きない柴は、神の軌跡を表すモチーフとされ、その後の予型論的解釈の中で、神の愛を一新に受けて、その純潔が穢れることのなかったマリアを示すと考えられるようになった」とある。

「燃える柴」と訳されている語は、「小木」「やぶ」など、当初の和訳聖書に見られた訳のほうが適しているように感じられる。また、「火」あるいは「光」として解釈されることもあり、「たいまつ」とする選択もあったのかもしれない。

漢訳聖書に見られる「棘」は英華字典の語釈から見て「いばらのやぶ」や「とげのある植物の垣根」というような意味であり、これも「柴」とは結びつかない。先行研究で調べたように、パレスチナには棘（とげ）のある植物が多く生えている。漢訳聖書の「棘」の訳は、こうしたパレスチナの自然の様子から考えると、違和感のない訳である。それを「柴」としたのは、ヘボンあるいはその周辺の人々が意図的に行ったものだと考えると納得がいく。この点について、本稿では以下のことを結論として示した。

古く「柴」は日本人にとって身近なものであり、伝統的に「神の依り代」として使われていた。その点で神とモーセとの対話の媒介としては適切なものと考えられ、「柴」と訳された。

しかし、現代では「柴」は昔話で触れるだけのものになってしまった。昔話に出て

くる「柴」は「枝」でしかなく、「柴」と訳した当時の意図が伝わりにくくなってしまったということだろう。

さて、このように和訳聖書で、あえて「柴」と訳されたということ、また、その「柴」の訳が現代では伝わりにくいと感じられてしまっていることを考えると、現代の国語辞典に掲載されている「柴」の語釈が十分ではないのではないかという問題も提起できそうである。

『大辞林』には「山野に自生する小さい雑木。また、薪や垣にするためにその枝を刈り取ったもの。そだ。しばき」とある。そのほかの国語辞典の掲載も大きくはかわらない。どういう木のことを指すのか、また、その大きさや用途を述べているだけである。しかしここまで述べてきたように、「柴」は燃料にするために日本人の生活に密接に関連している。また、「榊」と同様、神に祈る際に依り代とされた、あるいは神への供え物とされた。こうした「柴」の役割について、語釈で触れる辞書があってもいいのではないだろうか。

【注】

（１）　「新共同訳」では「枯れ枝」と訳されているが、「口語訳」「新改訳」で「柴」と訳されているものに「使徒言行録」(28:3) がある。「使徒言行録」(28:3)で「柴」の部分の訳がどのように変遷したかは、表 10 に示した。

（２）　明治学院大学図書館デジタルアーカイブス http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/search を使用した。

（３）　KJV の掲載内容は「聖書研究総合サイト　eBible Japan」を使って検索した。http://ebible.jp/bsrch/srch.html

（４）　ジャパンナレッジで「棘」を基本検索した。

（５）　佐蛇神能の「八重垣」は 2020 年 1 月 25 日に国立劇場で行われた第 135 回民俗芸能公演「出雲の神楽」で鑑賞した。柴の使用については、同公演のプログラムの解説に明記されている。

【参考文献】

いのちのことば社 (2019)『聖書翻訳を語る『新改訳 2017』何を、どう変えたのか』

大槻虎男 (1971)「聖書植物論考Ⅰ」『東北学院大学論集』(55)

岡部一興 (2019)「ヘボンの和訳聖書」2019 年度アジア神学セミナー明治学院大学キリスト教研究所

尾崎恵子 (2014)「研究ノート　エル・グレコの《受胎告知》における燃える柴の表象」『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』第 15 号

小林功芳 (1980)「横浜―和訳聖書誕生の地」『英学史研究 No.13』日本英学史学会

鈴木範久 (2006)『聖書の日本語　翻訳の歴史』岩波書店

鈴木英夫 (2008)「和訳聖書の植物名－翻訳委員社中訳から大正訳へ－」『白百合女子大学キリスト教文化研究論集 (9)』

西野嘉章 (1993)「十五世紀プロヴァンス絵画研究：祭壇画の図像プログラムをめぐる一試論」

西山松之助 (1982)「草刈り・柴刈り」『宿場民俗誌　しぶらの里』

浜健夫 (1954)「聖書の植物」『明治学院論叢』第 35 号

広部千恵子 (1995)「聖書の植物の姿と効用 6－旧約聖書の植物 2 (出エジプト記の植物) ―」『清泉女

子大学紀要』第 43 号
松村義敏（1947）「学界余滴　聖書中の植物名の訂正について」『基督教文化』（18）
松村義敏（1953）『聖書の植物』富山房
モルデンケ（1991）『聖書の植物』奥本裕昭翻訳・八坂書房